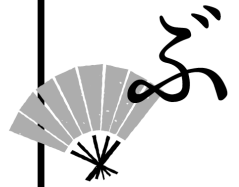


古典落語に



学



立川談四楼

落語家

第二十九回 お菊の皿

恐

いもの見たさというのがあります。番町皿屋敷の怪談で知られるお菊さんの幽霊が見たいと、ある日若者たちで意見が一致しました。お菊さんが死んだとされる廃屋に入ると、それらしき井戸があります。

「確かこの井戸だ、お菊さんが死んだのは」
やがて丑の刻（午前一時の前後二時間）になると、ゴーンという鐘の音とともにお菊さんの幽霊が現れ、一枚、二枚と皿を数え始めます。お菊さんは十枚組の皿の一枚を盗んだと言われ、死に追い込まれたのです。

九枚の声を聞くとその人も死ぬとの言い伝えがあり、六枚を聞いて逃げれば安全とも言われています。若者たちは六枚の声

を聞いて逃げ出すのですが、お菊さんが忘れられません。その美しさに魅了されてしまったのです。

翌

日、若者たちの人数はさらに増えました。六枚で逃げ帰り、また、お菊さんの美しさを周りに語るのので、見物人は日に日に増えるばかりです。人の噂（口コミ）は侮れないもので、気がつくとき驚くべき数に達していました。

そうなると、見物人を当てこんで、弁当や菓子、飲み物を売る者が現れました。様子を見た興行主はお上から許可をもらい、有料の棧敷席まで作る賑わいです。大勢の前でお菊さんは皿を数え、みな六枚で逃げ帰るということが夜毎に繰り返されました。

や

がて、販売されていた入場券も手に入れるのが困難になりました。今で言うチケットにプレミアがつくとい
うやつですね。

とにかく大そうな賑わいぶり、まるで遊園地の人気のアトラ
クションです。

「一枚、二枚、三枚」

「お、やっってるやってる。お菊さんはこのところ客が多いので
張り切って、少し芸がクサクなってるね」

「四枚、五枚」

「お、そろそろ危ねえぞ。逃げる仕度だ」

「六枚」

「それ逃げろ。おい邪魔だ、どけよ」

「前がつかえてんだよ、押すな」

「七枚」

「うわっ、体が……。おや、何ともねえぞ？」

「八枚、九枚、十枚」

「十枚？ どうなってるんだ？」

「十一枚、十二枚、十三枚、十四枚、十五枚」

「おい、一体何枚までいくんだ？」

「十六枚、十七枚、十八枚、おしまい」

「うへえ、おしまいときたよ。お菊さん、何だってそんなに数
えたんない？」

「分かんないかね、明日の晩は休むんだよ」

こ

れが『お菊の皿』ですが、落語の中では「滑稽噺」
に分類されています。はい。幽霊が出るのに怪談噺で
はなく滑稽噺なのです。恐い部分はまるでなく、全編笑いにあ
ふれているので滑稽噺だという言い方もできます。

とりわけ、客が増えていくシーンなどは、演者のギャグの見
せどころです。売られるものも演者によって変わり、かき氷や
アイスクリームはおとなしい方で、パンナコッタやジェラート
も売られます。その時代にヒットしているものをここに持ち込
むわけです。

サッカーや野球に例え、「五万五千人の大観衆が見守る中」
とやった人もいます。ああ、そうでした、チアガールを登場さ
せた人もいましたね。皿を数えるシーンになると立ち上がり、
ホイッスルを吹きながら、足を上げたのです。そのサービス精
神に爆笑でしたね。

元は上方落語ですが、今は東西の落語家が演じます。江戸落
語は『番町皿屋敷』（番町は現在の市ヶ谷見附内）を元にしま
すが、上方の元は『播州皿屋敷』です（播州は姫路城の本丸
下）。両方とも元はちょっと陰惨なところのある怪談ですが、
落語になると途端に滑稽噺になってしまうのです。どうぞ東西
どちらかの『お菊の皿』を聞いて、行く夏を惜しんでください。